

テーマ別研究発表

■ 2021年9月8日(水) 13:45 ~ 15:15 | 会場7 Zoom

■ スポーツ文化研究部会【課題C】口頭発表①

座長：尾川 翔大（日本体育大学）

13:45 ~ 14:00

[スポーツ文化-C-01] 現代に生きる薩摩の伝統的運動文化と『大久保利通日記』

*山田 理恵¹、藤谷 雄平²、高波 宗人² (1. 鹿屋体育大学、2. 鹿屋体育大学大学院)

14:00 ~ 14:15

[スポーツ文化-C-02] 秩父・多摩西部地域における身体文化としての民俗芸能の保存・伝承・促進の現状と課題、更なる飛躍の可能性に向けて

*安倍 希美¹ (1. 北里大学)

14:15 ~ 14:30

[スポーツ文化-C-03] 1930年代日本における女子デンマーク体操の再現と測定

実験スポーツ史による試み

*若槻 稜磨¹、松浦 早希²、当山 倫子³、近藤 雄大¹、矢幅 照幸¹、崎田 嘉寛¹ (1. 北海道大学、2. 神戸市立原田中学校、3. 神戸大学)

14:30 ~ 14:45

[スポーツ文化-C-04] 2代目ラジオ体操の「動き」に関する歴史的研究

3代目ラジオ体操における柔軟性要素との比較を通じて

*当山 倫子¹、近藤 雄大²、松浦 早希³、若槻 稜磨²、矢幅 照幸²、崎田 嘉寛² (1. 神戸大学、2. 北海道大学、3. 神戸市立原田中学校)

14:45 ~ 15:00

[スポーツ文化-C-05] 大学生アスリートを対象としたアンチ・ドーピング教育の課題

*深澤 浩洋¹ (1. 筑波大学)

15:00 ~ 15:15

[スポーツ文化-C-06] 小学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の成果の検討

児童を対象とした3年間の質問紙調査から

*宮崎 明世¹ (1. 筑波大学体育系)

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題C】口頭発表①

座長：尾川 翔大（日本体育大学）

2021年9月8日(水) 13:45 ～ 15:15 会場7 (Zoom)

13:45 ～ 14:00

[スポーツ文化-C-01]現代に生きる薩摩の伝統的運動文化と『大久保利通日記』

*山田 理恵¹、藤谷 雄平²、高波 宗人² (1. 鹿屋体育大学、2. 鹿屋体育大学大学院)

今日鹿児島では、「妙円寺詣り」「曾我どんの傘焼き」「赤穂義士伝輪読会」が、伝統的な三大大事に位置づけられている。たとえば、「妙円寺詣り」では、現在毎年10月の第4土・日曜日に、妙円寺詣りと行事大会、ステージ・イベントやウォークリーなどが盛大に開催され、観光化も図られている。

これらの鹿児島三大大事について、先行研究・文献では、薩摩藩に固有の教育組織であった郷中教育からの伝統とするものと、傘焼きについては、郷中教育を受け継いだ学舎で行われるようになったのではないかとするものがみられる。また、公刊されている『大久保利通日記』における江戸末期の記述に傘焼きは登場しない（山田ほか、2020）とされることなどから、これらの行事の伝統性については、さらなる検討が必要であると考えられる。

そこで、本研究では、鹿児島の伝統的な運動文化である「ハマ投げ」や「妙円寺詣り」が、『大久保利通日記』の江戸時代末期の記述において、曾我物語の輪読や他の運動文化に関連する活動などとともにどのように描かれているのかを再検討することとした。

「薩摩のハマ投げ」や「妙円寺詣り」が鹿児島の歴史を背景にどのように継承されてきたのか、それらの現代への適応過程については、これまでも考察されてきた（山田、2003；山田・渡辺、2011；山田ほか、2020）。その一環として、同日記における江戸末期の記述を、スポーツを通じた地域開発における文化資源の有用性という観点から、今日の鹿児島に根づいている三大大事や伝統打球戯を中心に再検討することは、現代に生きる薩摩の伝統文化の特質の一側面を考察することに繋がるといえる。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題C】口頭発表①

座長：尾川 翔大（日本体育大学）

2021年9月8日(水) 13:45 ～ 15:15 会場7 (Zoom)

14:00 ～ 14:15

[スポーツ文化-C-02]秩父・多摩西部地域における身体文化としての民俗芸能の保存・伝承・促進の現状と課題、更なる飛躍の可能性に向けて

*安倍 希美¹ (1. 北里大学)

1.はじめに 秩父地域と多摩西部地域の共通点は、秩父多摩甲斐国立公園に属し、豊かな自然とそこで育まれてきた民俗芸能が豊富に存在する一方、顕著な人口流出にて移住と雇用の促進・民俗芸能の継続という喫緊の課題を抱える事である。今迄この地域の民俗芸能の調査機会を有したが、そこで得た知見から当該地域における民俗芸能の現状課題と将来展望を見出す事を目的とする。

2.対象と方法 2014.12から2020.2にかけ、秩父・多摩西部地域の歌舞伎・式三番・獅子舞・神楽・人形芝居の、上演・リハーサル・稽古・学校教育場面等への参観を年平均50回程行い、映像撮影と保存会・学校・児童生徒・保護者、行政関係者等へのインタビュー等を行った。そこより今回のシンポジウムに沿う部分を抽出し結果と考察を導き出した。

3.結果と考察 秩父地域では教育委員会と連携し、小中学校での総合的な学習の時間を主として、保存会会員と教員の協力による本格的な継承活動が行われ、児童生徒は着実に技を修得していった。問題点として1) 指導料が無い若しくは著しく安い2) 将来の伝承に結びつく卒業後教育場面の不足3) 廃校のプレッシャー等があった。多摩西部地域では学校統廃合が進み学校で特定の芸能を扱うことは困難にて、地区の数少ない子どもと、お祭りの時に保護者の里帰りに同行した子ども達に対する継承が行われていた。管轄行政の名称は、文化財保護課・社会教育課・みらい創造課等様々で、必ずしも学芸員有資格者がいる訳ではなく正規雇用者ばかりでも無かった。民俗芸能限定で民間のNPO法人に委託している行政もあったが、その法人には文化財に造詣の深い学芸員がおり、既存の枠に捉われない斬新な発想に基づく活動を展開していた。今回のコロナ禍を、新しい生活様式に相応しく雇用促進にも繋がる創意工夫を行うチャンスと捕らえ行動に移せるか否かが、今後への分岐点になるのではないかと考えられた。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題C】口頭発表①

座長：尾川 翔大（日本体育大学）

2021年9月8日(水) 13:45 ～ 15:15 会場7 (Zoom)

14:15 ～ 14:30

[スポーツ文化-C-03]1930年代日本における女子デンマーク体操の再現と測定

実験スポーツ史による試み

*若槻 稜磨¹、松浦 早希²、当山 倫子³、近藤 雄大¹、矢幅 照幸¹、崎田 嘉寛¹ (1. 北海道大学、2. 神戸市立原田中学校、3. 神戸大学)

本研究の目的は、文献資料でしか確認できていない戦前期の体操を対象として、発掘・収集し得た映像資料に基づいて体操の動きを再現および測定し、歴史的考察を試みることである。

本事例で再現した体操は、1934年まで自由学園で教鞭をとっていたクローン女史が日本人女子学生に対して指導していたニルス・ブック基本体操（以下、女子デンマーク体操）である。主映像は、クローンが離日する際に制作された映像（1934、自由学園所蔵）であり、補完映像は、ブックが来日した際に撮影された映像（1931）である。

再現にあたっては、主映像の編集により動作が不詳な部分を補完映像から補足した。加えて、デンマーク体操実践歴10年（指導歴6年）が再現者となることで技術要素（リズム、テンポ、動きの深さ）を補填した。また、再現時には、実施者の胸部に心拍センサ（polar社）を装着して心拍数を記録し、比較のために現行ラジオ体操実施時の心拍数も測定した。

結果は、テンポを BPM95とし、補完映像から2つの動作を補足することで、女子デンマーク体操の25の動きを再現した。ただし、指先の細部の動作までは再現できなかった。また、再現時の心拍数（BPM）は、最大130（123）、最小75（87）、平均110（107）であった（安静時心拍数は75、括弧内はラジオ体操測定時の数値）。

再現した女子デンマーク体操の動きを現行ラジオ体操の動きと比較すれば、特徴的な類似点はルルヴェからプリエへの動作であり、相違点は腕振時に腕の交差や巧緻性を伴う複雑な動きの有無であった。他方で、女子デンマーク体操では、早い動作（1テンポ1動作）が心拍数に影響したと考えられる。

本研究の意義は、数値化によって比較可能な好個な資料を提示し得たこと、当時の女学生に内在した非操作的身体領域を明らかにする一助となったことである。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題C】口頭発表①

座長：尾川 翔大（日本体育大学）

2021年9月8日(水) 13:45 ～ 15:15 会場7 (Zoom)

14:30 ～ 14:45

[スポーツ文化-C-04]2代目ラジオ体操の「動き」に関する歴史的研究

3代目ラジオ体操における柔軟性要素との比較を通じて

*当山 倫子¹、近藤 雄大²、松浦 早希³、若槻 稜磨²、矢幅 照幸²、崎田 嘉寛² (1. 神戸大学、2. 北海道大学、3. 神戸市立原田中学校)

本研究の目的は、日本人が体操を通じて身体的な能力をどのように改善・向上させてきたのかを明らかにするために、消失した過去の体操の「動き」を歴史的に評価するという実験スポーツ史の一手法を提案することである。

本事例では、まず、基準となる体操を設定した上で、この体操の動きを映像のみから測定・評価する。次に、比較対象となる過去の体操を分析することで、この体操の動きがどのように歴史的に評価可能かを考察する。具体的には、現行の3代目ラジオ体操第1の柔軟性に関わる内容を映像から測定・評価し、2代目ラジオ体操第1と比較分析した上で、歴史的考察を試みた。

3代目ラジオ体操第1は、NHK制作の「テレビ体操」（2015年）映像を対象とした。柔軟性の要素は、頸（4）、肩甲帯（4）、肩（8）、肘（2）、前腕（2）胸腰（4）、股（6）、膝（1）、足（4）の関節可動部位（括弧内は動きの方向）について最大角度を判定しスコアを算出した。また、同様の部位を動作分析ソフト（Dartfish ProS）で通時的に把握し、柔軟性への作用の視覚化を試みた。一方の2代目ラジオ体操第1は、日本体操学会のプロジェクトで再現された映像（古川幸子代表作成）を対象として同様の作業を実施し、比較分析した。

柔軟性スコアの結果は、2代目ラジオ体操第1の方が3代目ラジオ体操第1より頸、肘、膝以外で低いと判断された。他方で、柔軟性作用の総量は、2代目ラジオ体操第1の方が3代目ラジオ体操第1より約25%高くなった。この結果を歴史的に評価するとすれば、2代目ラジオ体操第1の動きは、3代目ラジオ体操第1と比べて体幹以外への動きによる見かけの柔軟性が高かったと示唆された。すなわち、2代目ラジオ体操が実施されていた時代は、創案者が意図していたかどうかは別として、戦時下における身体観の連続的側面が残存していたと推察される。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題C】口頭発表①

座長：尾川 翔大（日本体育大学）

2021年9月8日(水) 13:45 ～ 15:15 会場7 (Zoom)

14:45 ～ 15:00

[スポーツ文化-C-05]大学生アスリートを対象としたアンチ・ドーピング教育の課題

*深澤 浩洋¹ (1. 筑波大学)

大学生アスリートを対象としたアンチ・ドーピング教育および関連する取り組みが国内においてどのようになされているかを確認し、その課題を探ることが本発表の目的である。彼らを対象とする理由は、現実的にアスリートとしてドーピング検査を受ける可能性があり、また将来スポーツ指導者などとして高いアンチ・ドーピング意識を必要とされているためである。その教育の課題を探るために、大学生アスリートを対象としたアンチ・ドーピング教育の現状を確認し、アンチ・ドーピング教育の目的やねらいを把握する。また、アンチ・ドーピング教育の現状との齟齬やその困難性を明らかにしたい。アンチ・ドーピング教育に関連した調査研究のレビューを行い、アンチ・ドーピング教育関連の教本等からその目的・ねらいを抽出し、両者の間の隔絶の有無とその背景について検討する。その結果示されたのは、知識不足により、本人にはそのつもりがなくてもドーピング違反になる事例が多い現状に鑑み対策を講じようとする傾向である。倫理・道徳的な教育というよりもむしろ知的教育への比重が高い傾向がみられ、前者の教育の必要性や有効性、またそうした教育の意義を再検討する必要がある。

テーマ別研究発表 | スポーツ文化研究部会 | 【課題C】多様なスポーツ文化の保存・流通・促進をいかに刷新していくか

スポーツ文化研究部会【課題C】口頭発表①

座長：尾川 翔大（日本体育大学）

2021年9月8日(水) 13:45 ～ 15:15 会場7 (Zoom)

15:00 ～ 15:15

[スポーツ文化-C-06]小学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の 成果の検討

児童を対象とした3年間の質問紙調査から

*宮崎 明世¹ (1. 筑波大学体育系)

東京2020オリンピック・パラリンピック大会の開催に向けて、オリンピック・パラリンピック教育が進められてきたが、大会の延期を受けてその取り組みの多くは1年間延長され実施された。感染拡大後は、新型コロナウイルス感染防止の観点からさまざまな活動が制限される一方、オンライン機器や関連設備、コンテンツの整備が進み、これまでとは異なる取り組みが行われることともなった。スポーツ庁のオリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業（全国展開事業）では、①スポーツ及びオリンピック・パラリンピックの意義や歴史に関する学び、②マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成、③スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築、⑤日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成、をテーマに教育活動を進めてきた。テーマに沿ってさまざまな教育活動が展開される中、学校外から講師を招いての講演やスポーツ講習・体験などが多く行われ、その事前学習として「大会そのもの」についての学びが多く行われた。この事業では、2018年から事業の参加自治体の推進校において、教育プログラムに参加した小学校4年生以上の児童生徒を対象にアンケート調査を行った。調査項目は、オリンピック・パラリンピックやスポーツに対する興味と、教育テーマに沿った内容であった。推進校は、多くの自治体において小学校の比率が高かったが、その理由として、小学校ではクラス担任がほとんどの授業を担当するが、中高では教科担任制となることや、小学校は比較的学校規模が小さく、全校で統一したテーマに取り組みやすいことが考えられる。このことから、教育への取り組みや成果も校種ごとに検討する必要があると考え、本研究では全国展開事業の推進校の中でも小学校に焦点を当て、オリンピック・パラリンピック教育の実態と成果を検討した。